

「海、川、野、そして里山」

豊かな自然を生かした射水市を創造

射水市長(富山県)

夏野元志



はじめに

射水市は、富山県のほぼ中央に位置し、海、川、丘陵地など緑と潤いあふれる自然豊かな環境にあり、半径7kmのコンパクトでまと

まりのある中に港湾、鉄道、高速道路など社会基盤が整備され、住まい、福祉、教育環境が充実した住みやすいまちとなっている。

東西を県内2大都市である富山市、高岡市に接し、北には国際拠点港湾伏木



立山連峰を望む「海王丸」

富山港(新湊地区)とその後背地に県内最大級の企業団地、南の内陸部には北陸自動車道小杉インターチェンジや流通業務地区を擁し、環日本海交流の拠点として、360度の交流・連携を可能とする優位性を持っている。

神通川と庄川の間広がる射水平野は、水の豊かな土地として古くから栄え、古代の人々は「出ずる水の地」と呼び、この言葉から「いみず」という名が生まれ、その後、越中国守であった大伴家持がまとめたとされる万葉集において、「射水」という地名が初めて登場する。

旧北陸道と越中浜往来(浜街道)

市内にはかつて旧北陸道と越中

浜往来があり、それぞれ街道沿いを中心に交通の要衝として発展してきた。

旧北陸道は、市の中央部を通る東日本と西日本を結んだ道で、加賀藩の参勤交代や家臣の江戸往来のため、高岡町(現在の高岡市)から大門・小杉・下村を通って東岩瀬(現在の富山市)に向かうルートが往還道として整備された。

当時は徒歩で旅することが多かったため、一定の距離ごとに旅行者が宿泊休憩する宿場が設けられ、射水地域には、大門新町・小杉新町(現在の三ヶ、戸破の一部)・下村の三カ所の宿場が置かれ、多くの人や物が行き交った。こうした地勢からここに居住する人が増え、あいの風とやま鉄道(旧JR北陸本線)と、県道富山高

岡線を軸に東西に細長く市街地を形成してきた背景がある。

越中浜往来(浜街道)は、本市の北部新湊地区の放生津より浜沿いに西岩瀬から富山を通り、富山湾沿いの大動脈として中世の頃にはすでに主要な街道として、さまざまな人・物が行き交っていた。

万葉の時代には歌人・大伴家持が、戦国の時代には羽柴秀吉などの英雄たちが、そして江戸時代には俳人・松尾芭蕉が、この地を旅した。彼らはさまざまな歌や逸話を残し、それらは今でも地元の人々に語り継がれている。

当時と今を比べれば、海岸浸食などにより道筋は変わり、路面は舗装され、街道沿いの松並木もほとんどなくなり、風景はずいぶん変化したが、眼前に広がる海や自



放生津八幡宮祭の曳山

然は、昔と変わらない姿で訪れる人を迎えてくれる。

また、毎年10月には、江戸時代中期より続く放生津八幡宮の秋季例大祭の「新湊曳山祭」が行われ、地元町内の13基の曳山が街道沿いを曳きまわされ、県内外から多くの観光客が訪れ、賑わう。

街道での事業の取り組み

「旧北陸道」沿いには、現在も、宿場町の情緒漂う歴史的な建造物

や道標等の史跡が数多く存在し、特に明治時代の建物「旧小杉貯金銀行」、大正時代の建物「旧小杉郵便局」、昭和時代の建物「旧小杉町役場」等見応えのある建物がある。

そうした旧北陸道の景観を保全しようと地元の三ヶ・戸破地区住民が中心となり、毎年9月に「旧北陸道アートin小杉」が開催されている。このイベントは、旧北陸道の店舗・公共施設等に芸術作家等のアート作品を展示することで、当時の伝統や歴史的風情を感じる街並みを楽しんでもらうことを目的に平成14年から実施され、昨年で18回目を数える。

「浜街道」沿いには、かつて北前船の寄港地として栄え、今は両岸に漁船が並び独特の景観を呈する内川、富山湾の宝石とも称される「シロエビ」や「ベニズワイガニ」など豊富な魚が水揚げされる新湊漁港がある。このエリアの食や水辺空間など豊かな地域資源を生かし、交流人口を受け入れ地域活性化を図るため、カフェやコンベンションホール機能を備えた複合交流施設、交通ターミナルや駐車場の整備を本年度より実施している。この整備に合わせ、県内有数の

一口メモ

観光施設である海王丸パーク等を訪れる観光客を呼び込むため、北陸新幹線新高岡駅やあいの風とやま鉄道小杉駅から当該施設を結ぶ周遊バスの運行と、まちなかへの電動カートの導入を図り、観光客の利便性向上とともに、地域高齢者の買い物の足を

確保し商店街の復興と活性化につなげていきたいと考えている。「豊かな自然 あふれる笑顔 みんなで創る きららか射水」を目指し、地域と一体となり、歴史的景観を保存しつつ、新たな施策を展開しながら魅力あるまちとなるよう取り組んでいきたい。

越中浜往来(浜街道)

越中・放生津に「幕府」を開いた!?

足利義材(義種) 義尹 1446年
生まれ、24歳で10代将軍に就任
室町幕府前将軍・義尚の遺志を継ぎ、大名征伐のため京都を留守にしている間に、伯母や従兄弟からクーデターを起こされ、幽閉後、

鳥流しになるところを脱出。救ったのは、支援者の一人で放生津に拠点を築いていた畠山氏の重臣・神保長誠。

当時27歳の義材は逃亡中とはいえ将軍として力を持ち、放生津で政権を樹立した。現在、放生津幕府と呼ばれる政権は、越中公方や越中御所などとも呼ばれた。

およそ5年にわたる放生津滞在中、義材のもとには宗祇ら連歌師などが頻りに訪れ、歌会も多く催された。このことから、義材は越中の芸術・文化の振興・発展にも大きく貢献したとされている。



企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」